

■（１１２）報道が「最後の砦（とりで）」に

女子柔道の国際大会で、畳の脇に座っている童顔の男性はいったい誰なのかとテレビを見ながらいつも思っていた。選手たちから「暴力とパワハラ」を訴えられ辞任に追い込まれた日本代表監督だった。国内スポーツ界の大問題に発展している。

高校運動部の体罰が社会問題化した中、世界をリードするはずの日本柔道界の実情を表面化させたのは、報道だった。選手たちは当初、全日本柔道連盟に被害を訴えた。監督は暴力を認めたが、始末書だけで続投した。選手たちは業を煮やして上部の日本五輪委員会に告発したものの、内々の戒告処分を受けただけだった。その後、新聞やテレビで取り上げられて、ようやく大きなうねりとなった。記者がどうやって問題をつかんだかは、「情報源の秘匿」もあり、知りようがない。ただ、結果だけを見れば、報道機関が「最後の砦」になったようだ。問題解決を願う人から救いを求められたならば、記者冥利に尽きる話だ。

「先生に言いつけるぞ」。子供はよく、けんか相手などに向かって言う。先生が頼れる人だからだろう。困った時に相談される存在であり続けてほしい。記者も同じだ。（山）